

「観る」という行為に

潜んでいた私の感情

田代 和美

夏休み前にA男のことが話題になる園内研究のために、ある園で観察をした。その日のA男は行動を共にすることが多いB男を含めて五人で砂場で遊んでいた。遠目から見ると盛り上がって遊んでいるように見えるその場の中で、A男は（私から見れば）C男に対して執拗な言葉での暴力を繰り返していた（たとえば「四人で考えるんだ、C男はだめ、C男は嫌いなのだ」）。その場を見ている私には、そのような言葉の発せられる因果関係が全く分からなかった。遊びの流れとは無関係に言葉は発せられていた。急に「C男なんかもう遊ばない」というと、それを受けてB男が「C男、もう



入れてあげないことにする？」とお伺いを立てるように言う。それを受けてA男は、急にやさしい声で「みんなそう言うんだったらそうする。僕もみんなと同じ」と言う。「ね、じゃあ今度、虫取りしよう、みんなで」とB男が言うとすかさずA男が「C男は見るだけ、C男がいるとねえ……？（聞き取れず）でかわいそうでしょ、ちようちよたち」などと言う。

第三者という立場で観察し、その後保育者と一緒に考える機会がある場合に、どのような視点で観察するのかということを意識はしてきた。観察者が保育者と違うのは、それまでの日々の生活の流れを知らないことである。しかし保育をしない分、観察している時間内での出来事はじっくり見ることができるといえる。だから丁寧にみてみよう。それに加えて私自身の中で意識してきたことは、子どもの行為を肯定的に促えようということだった。

しかし前記のような場面を観察・記録しているプロセスで様々な疑問が私の中に湧き出て渦巻いていた。もくもくと水をくんでいるC男に、A男はどうしてこのようなことを言うのだろうか。C男はどうして反論したり向かっていたりしないのだろうか。A男とB男の関係も理解できない。B男はなぜA男にお伺いを立てるような言動をするのだろうか等々……。怒りとしか言いような感情が湧く一方で、子どもの行為を



肯定的に促えたいと意識しているのにもかかわらず、否定的にしか見られていない自分自身の促え方にジレンマを感じ続けていた。

観察した後に、もう六年も前になるが、やはり同じ様な状況でジレンマに陥った自分がいたことを思い出していた。今以上に保育のことが分からない自分が、それでも呼ばれるままに保育現場に行き始めた頃のことだ。その日の私は、担任が気になってるD子を見ていた。D子はE子と二人でままごとをして遊んでいた。その遊びの中では「はい朝ですよ、起きなさい」「ご飯を食べなさい」「もう夜よ、寝なさい」などE子が一方的にD子に指示し、D子はひたすら言われるままに動いている……その繰り返しが続いていた。その場面を見ていた私は、その二人の関係を肯定的に見ることができなかった。その後の園内研究の話し合いの中でD子の話題になった時、D子のためには二人の関係を離れた方が良いのではないかとという方向に話が進み、私も何となくもやもやとはしていたが積極的に異論を唱えられなかった。いやそこでの保育者と私の関係を考えると、私ができるような方向性で発言をしたからそう進んでいったのだと思う。しかし園内研究が終わった後でも私の中では何か釈然としないまま、そのことが引っかかっていた。そのため後日、改めてその園に行かせてもらった。すると私が見に行ったということもあったのかもしれないが、保育者は意図的に



二人を引き離そうとしてD子と一緒に遊び、クラスの中でE子の居場所がなくなっていて愕然としてしまった。その日の保育の後、担任と話しながら、私自身が二人のあり様を肯定的に見られなかったことを反省し、それを伝えた。そして第三者として観察をする時には、今、その子にとって何が大事なのか、何がその子を支えているのかを含めて現在の子どもの姿を大切に、肯定的に促える視点を持つと決めたのだ。た。

その六年前の失敗があるから、そしてそれ以後子ども今のあり様を肯定的に見ようと思がけていただけにA男の姿を肯定的に見られない自分が情けなく思えた。理性と感情が分裂し、感情が優位に立っていた。しかし一度感情が優位に立つと、なかなかそのことから離れられなくなる。私はどのように話し合いに臨んでいいのかかわからないままに臨むことになった。

話し合いの中では、A男の日頃の様々な姿が語られたが、その中である保育者が全く違う場面でのA男の姿について次のような話をした。その保育者は、ある時A男を含めた五人の男児が危ない場所であらうちよを採らうとしていたので、他の場所に移るように伝えた。すると他の子どもたちは決まり悪そうにそこを離れてあらうちよを追い続けたが、A男は「ここにしかいねえよ。もっと探せよ」などといって動か



かった。そのうち、ただ追いかけていても捕まらないので「網みたいの作ってこよう」と他の子どもたちは保育室に戻ったのだが、A男は「俺は行かない。俺のも作って来いよな」などと言いながらその場で待っていた。その間A男は「セロテープのあるところわかんねえのかよ」などとぶつぶつ文句を言い続けて待っていたが、みんなはなかなか戻ってこないの、結局最後にはその場を離れたという。その姿を通してA男の空強がりとその裏の弱さが見えること。何とかしてみんなの中に自分を位置づけたいが、どうしてもできない。そしてそれが悔しくてしょうがないこと。口では大将気取りなんだけど大将にはなれないこと。他の子どもたちのように遊びのイメージにすーっと入り込めずに乗り遅れることなどのA男の姿に関する読みとりが語られた。

この話を聞いて、観察していた場面でのA男の行為を読みとる視点が私の中で急変した。自信がなく、遊びのイメージについていけない中で他児を排してもしないと安心して存在できないA男の姿が浮かんできた。これも一つの読みとりの視点にすぎない。しかしこれによって私自身はとてほっとしたのである。ようやくA男に感情移入できた。弱い部分をもつ存在として見えてくると感情移入できるのが私の特徴のようだ。感情移入できずに、批判的に見ていた目から寄り添える方向に変わっていく。感情に支配されるか、それから解き放たれて考えることができるのかの分岐点はその子どもに感情移入できるかどうかにある。私の場合は弱い立場・つらい立場には感情



移入できても、人を排除したり・否定する場合には感情移入できにくい。対子ども（対等であるべきと思っている関係）に関しては、妙に正義感が働くようだ。人を理由もなく（少なくともその時点ではそう見えた）否定したり排除してはならないという埋め込まれた倫理意識が彼に対する私の怒りの感情の根柢にあるのかもしれない。いやもつと根本的には、人から支配されたくないという私自身の感情があるのだと思う。だから支配されている（ように見える）側に必要以上に感情移入してしまうのだろう。その感情はその子どもの感情以上に私の支配されたくないという感情なのだと思う。頭で肯定的に見なくてはと思いついていても、それだけでは感情の部分はコントロールできてはいない。だから六年を経て再び同じジレンマに陥ったのだろう。自分の中に生じてくる感情の中身が見えてきて初めて、それはコントロールできるのかもしれない。保育者と違って日々の生活の中で子どもを継続的に見ていない分、観察者として子どもの行為を観る時の自分の視点を吟味していかないと、自分自身の感情を混同した状態で子どもを見ていることは結構ありそうだ。

（お茶の水女子大学）

